

軽種馬の生産構造

— 階層的特徴について —

山 根 勝 次

は し が き

本誌第2号において軽種馬の生産構造のうち歴史的、地帯的特徴を抽出し分析検討を加えておいたが、本号では階層的な観点から生産構造をみてみよう。

軽種馬生産という牧歌的なイメージがあるが、その飼養実態は最低1頭飼育から最高217頭飼育（昭和51年12月末）に分布しており、かつ「仔分け生産方式」という特殊な生産が行なわれている関係上、その階層性は複雑をきわめている。本号では繁殖牝馬の飼養形態を中心に牧場規模を規定し、その階層的特徴について分析検討を加えることとし、仔分け生産方式に伴う階層性については後日の機会に譲ることとする。

飼養動向の階層的特徴

日本軽種馬協会資料によると、昭和51年12月末現在で飼養戸数は3,063戸であり、繁殖牝馬飼養頭数は18,266頭であり、1戸当り繁殖牝馬飼養頭数は約6頭である。その内容について若干分析を加え、軽種馬生産の飼養戸数の階層的特徴を抽出してみよう。

まづ飼養戸数の年次別変遷を第1表でみると総戸数では40年から47年までは漸増傾向を示し、51年では3,063戸となっている。このように総戸数では47年を頂点に漸減傾向を示すものの、品種別（アラ、サラ別）飼養戸数の動向をみると軽種馬生産の特徴が理解される。すなわち、サラ系飼育戸数は40年1,013戸から毎年漸増し10年後の50年では2,081戸と約倍の数字を示している。それに対し、アラ系では40年1,613戸から43年まで漸増し1,893戸の頂点を示し、44年以降は漸減と漸増を示しながら51年では1,009戸となるに至った。この数字こそ軽種馬生産が「競馬」そのものの影響を直接受けることを物語っている。すなわち中央競馬はサラ系中心の番組編成であり、アラ系は毎年140頭程度の購買という関係からしても飼養動向をサラ系へと傾斜することは当然である。また地方競馬においてもアラ系からサラ系へと傾斜している傾向がみられる関係から当然、アラ系の漸減という結果を示すことになる。

つぎに1戸当り繁殖牝馬飼養年次別変遷をみると、全国平均では40年の3.01頭から始って漸増し51年では5.96頭となっている。これをアラ系、サラ系別にみると、ほぼ同じ傾向を示しているが、サラ系では49年を頂点にして50年、51年は多少ではあるが漸減傾向を示している。

第1表 繁殖牝馬飼養戸数の年次別変遷

(単位 頭)

区分 年次	飼 養 戸 数			繁 殖 牝 馬				1戸当り繁殖牝馬			最高 飼育 頭数
	サラ系	アラ系	計	サラ系	アラ系	軽 そ の 他	計	サラ系	アラ系	計	
40	1,013	1,613	2,626	4,040	3,560	314	7,914	3.98	2.2	3.01	60
41	1,028	1,695	2,723	4,562	3,947	352	8,861	4.43	2.3	3.25	75
42	976	1,875	2,851	5,268	4,116	291	9,675	5.39	2.19	3.39	74
43	1,133	1,893	3,026	6,000	4,460	277	10,737	5.29	2.35	3.54	78
44	1,295	1,750	3,045	7,027	4,960	273	12,260	5.42	2.83	4.02	89
45	1,533	1,661	3,194	8,059	5,390	246	13,695	5.25	3.24	4.29	102
46	1,470	1,891	3,361	9,036	5,876	230	15,142	6.14	3.1	4.51	128
47	1,573	1,840	3,413	10,099	5,246	142	15,487	6.42	2.85	4.54	144
48	1,808	1,598	3,406	11,815	5,059	102	16,976	6.53	3.16	4.98	174
49	1,933	1,466	3,399	13,662	5,178	50	18,890	7.06	3.53	5.56	219
50	2,081	1,214	3,295	14,349	4,672	27	19,048	6.89	3.84	5.78	215
51	2,054	1,009	3,063	14,142	4,111	13	18,266	6.88	4.07	5.96	217

(注) 1. 日本軽種馬協会資料より作成。

2. 40年以前の調査しておらず資料はない。

アラ系では漸増傾向を示している。

以上のような飼養動向は規模拡大という傾向を示しているが、この内容をもう少し経営規模の階層性という観点から分析してみよう。

規模別飼養戸数の推移に階層性を加味して示したものが第2表の繁殖牝馬飼養規模別百分率表である。この表より理解できることは1～2頭層では40年72.3%を示していたものが51年では34.6%と低下している。3～5頭層では40年20.1%であったものが漸増し51年では32.8%を示している。6～10頭層でも40年5.6%が漸増を示しつつ51年では約4倍の22.8%となっている。11頭～15頭層でも40年1.3%から漸増を示し51年では5.4%となっている。16頭以上層では40年では僅か0.8%であったものが51年では4.4%と確実にその地位を確立してきている。この傾向を12年間という短い期間から推論することには問題があるとしても、軽種馬生産の階層性としての結論は両極分解している。すなわち、1～2頭層の減少は脱飼育という傾向を示すと共に軽種馬生産専業へと自立化する中規模飼育層がみられる。また資本の論理による企業的牧場経営が確立されているという傾向がみられる。

これらの事実をより正確に証明するためにサラ系、アラ系の飼養規模別百分率表をみると第3、4表のごとくである。1～2頭層はサラ系、アラ系とも減少し、3～5頭層ではサラ系、アラ系とも漸増している。6～10頭層においても、サラ系、アラ系とも漸増しているが、11頭～15頭

第2表 繁殖牝馬飼養規模別百分率表

年次 \ 規模	1 ～ 2 頭	3 ～ 5 頭	6 ～ 10 頭	11 ～ 15 頭	16 頭 以上
40	72.3	20.1	5.6	1.3	0.8
41	67.9	22.8	6.7	1.8	0.9
42	65.7	23.9	7.2	1.9	1.5
43	62.4	25.6	8.6	2.1	1.4
44	59.2	27.4	9.3	2.4	1.7
45	49.6	31.7	13.6	3.2	2.0
46	50.4	31.8	12.6	3.2	2.0
47	48.0	31.7	14.3	3.6	2.4
48	46.8	30.4	16.4	3.7	2.8
49	40.8	32.7	18.2	4.8	3.6
50	38.8	32.8	19.3	5.7	3.4
51	34.6	32.8	22.8	5.4	4.4

- (注) 1. 日本軽種馬協会資料より作成
 2. 規模頭数はアラ系・サラ系の合計数である。

第3表 繁殖牝馬（サラ系）飼養規模別百分率表

年次 \ 規模	1 ～ 2 頭	3 ～ 5 頭	6 ～ 10 頭	11 ～ 15 頭	16 頭 以上
40	54.5	27.7	12.5	3.4	1.9
41	52.7	26.5	14.4	4.2	2.3
42	47.6	26.7	16.8	4.4	4.4
43	44.0	30.5	16.9	5.2	3.4
44	45.0	29.7	16.4	5.1	3.8
45	36.7	32.0	21.1	6.2	4.0
46	34.4	33.0	21.4	6.7	4.4
47	31.7	33.1	23.2	6.9	5.0
48	34.7	29.9	24.1	6.3	5.1
49	29.5	31.6	25.2	7.5	6.2
50	30.0	31.9	24.7	8.3	5.2
51	27.7	31.5	27.3	7.3	6.3

- (注) 日本軽種馬協会資料より作成

層になるとアラ系の漸増率はサラ系に対し低い。11頭以上層はサラ系中心の專業飼養という形態に転化してゆくことになる。アラ系飼養の限界は10頭程度といふことができる。それに対し、サラ系飼養はより多頭化が進行しそのウエートも高くなっている。

輕種馬飼養は1頭飼育から51年度では最高217頭飼養という巾広い飼養形態が存在し、かつ、アラ系、サラ系など複雑な生産構造を持つのが輕種馬生産の飼育動向である。

飼養動向の階層的特徴を要約すると次のように考えられる。

- ① 飼養戸数の減少傾向がみられる。この現象は、生産過剰の中にあつての実質的削減であり、輕種馬生産基盤の縮少という生産者にとってはきびしい試練の時代に入つたものと考えられる。
- ② 1～2頭規模の複合経営ないし少数規模経営の減少が目立ち、6頭以上層では逆に増加している。この6頭から10頭層は家族労働を中心にした主業ないし專業経営層であり、大きな伸びを示している。
- ③ 兩極分解、中規模飼育肥大化の傾向を示している。すなわち、1～2頭層からの脱飼育の減少、ないし3～5頭層への上層がみられる。逆に16頭以上層は着実に規模拡大をはかり、企業的経営への展開がみられる。
- ④ 小数の大規模な企業的牧場から量・質ともに優秀な馬が生産されている。輕種馬生産の低辺をささえる多数の零細・小規模な牧場からは量的にも質的にもやや劣る馬の生産がなされている。資本の集中化によって輕種馬生産は量・質ともに分解を促進させている。

第4表 繁殖牝馬（アラ系）飼養規模別百分率表（%）

年次 \ 規模	1 ～ 2頭	3 ～ 5頭	6 ～ 10頭	11 ～ 15頭	16頭 以上
40	83.4	15.4	1.2		
41	77.1	20.6	2.0	0.3	
42	75.1	22.4	2.2	0.3	
43	73.4	22.7	3.6	0.3	0.1
44	69.7	25.7	4.1	0.5	0.1
45	61.5	31.5	6.4	0.5	0.1
46	62.8	30.8	5.9	0.5	0.1
47	61.9	30.5	6.7	0.7	0.2
48	60.5	31.0	7.8	0.8	0.1
49	55.6	34.2	8.9	1.2	0.1
50	53.7	34.5	10.1	1.4	0.2
51	48.7	35.5	13.6	1.6	0.7

（注） 日本輕種馬協会資料より作成

軽種馬生産牧場の経営規模

軽種馬の生産の基礎的な要素は「繁殖牝馬」であることはいうまでもない。繁殖牝馬という資本装備をもって経営規模の尺度として、その階層性を分析することとする。

日本軽種馬協会調査資料によって繁殖牝馬種類別飼養頭数別飼育戸数を示すと、第5表のごとくである。この調査資料が、わが国における軽種馬生産の階層性を分析する場合の唯一のものである。この調査資料を基礎にして第6表の軽種馬生産牧場の規模別区分指標を考慮し、筆者の総合的判断によって、つぎのように牧場規模を分類し、それぞれの特徴についてみてみよう。

繁殖牝馬を飼育している戸数は3,063戸であり、その飼育状況をみると1～2頭飼育の戸数が1,057戸で全体の34.6%を占めている。この階層を「零細牧場」として取扱うこととする。つぎに3～5頭飼育の戸数が1,005戸で全体の32.8%を占めている。この階層を「小規模牧場」として取扱うこととする。つぎに6～15頭飼育の戸数が864戸で全体の22.8%である。この階層を「中規模牧場」として取扱うこととする。つぎに16頭以上の飼育戸数は135戸で全体の

第5表 繁殖牝馬種類別、飼養頭数別飼育戸数

(52.11現在)

頭 数	区 分	サ ラ 系			ア ラ 系			計	牧 場 区 分		牧 場 規 模
		サ ラ の み	サ ア ラ 併 飼	小 計	ア ラ の み	ア サ ラ 併 飼	小 計		戸 数	比 率	
1	275		275	322	—	322	597	1,059	34.6%	零 細 牧 場	
2	164	129	293	169	—	169	462				
3	114	106	220	70	122	192	412	1,005	32.8	小 規 模 牧 場	
4	90	145	235	23	49	72	307				
5	93	99	192	8	86	94	286				
6	80	98	178	7	41	48	226	698	22.8	中 規 模 牧 場	
7	59	68	127	1	39	40	167				
8	32	65	97	1	13	14	111				
9	34	64	98	3	15	18	116				
10	27	34	61	2	15	17	78	166	5.4		
11	28	14	42	—	6	6	48				
12	14	24	38	—	1	1	39				
13	21	13	34	—	2	2	36				
14	13	5	18	—	6	6	24				
15	9	9	18		1	1	19				
16～20	48	13	61	1	5	5	67	135	4.4	大 規 模 牧 場	
21～30	29	10	39	—	1	1	40				
31～40	16	4	20	—	—	—	20				
41～	6	2	8	—	—	—	8				
計	1,152	902	2,054	607	402	1,009	3,063	3,063	100		
比 率	37.6	29.4	67.0	19.8	13.2	33.0	100%				

日本軽種馬協会資料による

第6表 軽種馬生産牧場の規模別区分指標

区分指標	規模										
		繁殖牝馬飼育頭数	経営組織形態	アラ・サラ飼育状況	農業経営との密着性	労働力	自己有馬、仔分け方式	仔馬生産の血統状況	育成形態	飼育条件(厩舎、追馬場)	放牧地、採草地の有無
零細牧場	2頭以下	個人組織	アラ中心、サラ従	完全に密着している	家族労働のみ	仔分け方式、自己有馬	C、B級馬生産	当才馬のみ飼育、2才馬の育成所または牧場預託	悪い	ほとんどなし	なし
小規模牧場	3～5頭	個人組織多、法人組織少	サラ、アラ併飼	半密着である	家族労働中心、雇傭労働従	自己有馬、仔分け方式	B、C級馬生産	当才馬のみ飼育、2才馬預託、2才馬まで一貫飼育	悪い	不十分ながらある	なし
中規模牧場	6～15頭	法人組織多	サラ中心	密着性なし	雇傭労働中心、家族労働従	自己有馬	良血馬(A級馬)生産	2才馬まで一貫飼育、預託馬飼育	追馬場もあり良い	豊富にある	シンジケートに加入
大規模牧場	16頭以上	法人組織	サラ専養	密着性なし	雇傭労働	自己有馬	良血馬(A級馬)生産	2才馬まで一貫飼育、預託馬飼育	追馬場もあり良い	豊富にある	個人所有、シンジケート加入
企業性への動向	流動的である	内地馬産地のほとんど北海道にも相当ある	北海道、青森を中心とする。内地馬産地にも存在する	企業化を目ざしている	資本主義的企業化	資本主義的企業化	資本主義的企業化	北海道中心青森に散在する	強い	ある場合が多い	北海道中心青森に散在する

4.4%である。この階層を「大規模牧場」として取扱うこととする。

以上のごとく、軽種馬生産牧場といっても、1頭飼育の牧場から最高飼育頭数217頭飼育の牧場が分布している。飼育頭数という量的分類のみでは、牧場規模の階層性を分析する場合なお不十分である。質的な要素すなわちアラ系、サラ系をも加味してみなければならない。筆者の牧場規模の分類においても、それら量・質両面から考慮している。

以下、第6表によって区分指標を中心に規模別特徴をみてみよう。

a. 零細牧場

この階層に属する牧場（stock-farm）は家族労働力を中心とし、しかも農業経営と完全に密着した主農副馬的なアラ系基礎牝馬1ないし2頭飼養しているごく零細な牧場である。この階層は牧歌的イメージのわく牧場ではなく、人間と馬とが同じ屋根の下で暮すという「人馬一体」である。母屋の一部が馬小屋（馬房）となっており、土間をへだてて馬の長い顔がいつでもみられるという飼育形態が、この階層の大部分である。かつて戦前の馬の飼育はそのほとんどが、この母屋での人馬同居形式による飼養であった。軽種馬飼育になっても、戦前からの飼養慣習がそのままひきつがれている。

零細牧場に属する経営が最も多く分布しているのは、鹿児島、宮崎、熊本、福島、宮城、岩手、青森など内地馬産地である。この階層は主としてアラ系産馬を生産していることが特徴的である。その理由は資金面よりの制約がその第1の理由である。すなわち繁殖牝馬の購入価格が安くなければならない。この階層で購入しうる繁殖牝馬は100万円以下のものとなる。100万円以下の繁殖牝馬となるとアラ系しか購入しえない。したがって、この階層にアラ系飼養牧場が集中的に存在しているのである。また、この階層は農業経営が主であるという関係から、飼育技術が容易であるアラ系飼養という結果となっている。

軽種馬育成に不可欠の放牧、採草地が不十分なため、産駒が当才で売却される場合もあり、あるいは2才馬はほとんど育成牧場ないし中、大規模牧場に預託している。

基礎牝馬1頭ないし2頭では馬産専門に自立しえない。したがって農業経営と密接に関連させながら、最近の競馬ブームの波に乗って馬産の比重を高めようと努力している。具体的には、アラ系牝馬の増頭、それも良血馬を獲得しようとしている。なお、アラ系牝馬からサラ系牝馬への転換も意図している。しかし、アラ系からサラ系に交替するにともなって、仔分け方式（馬小作方式）による経営拡大がみられる。この仔分け方式がこの階層の牧場にみられるのは、サラ系馬の購入が資金的に困難であるためである。一般的にアラ系牝馬ならば150万円以下（普通100万円程度）で購入することができるが、サラ系牝馬になると200万円以上でなければ購入することができない。したがって、自己有馬方式による生産よりも、仔分け方式による生産にたよらざるをえない。

この階層の牧場でサラ系を導入したとしても、厩舎、追馬場、放牧、採草地などの飼育条件や技術との関連で、満足した育成ができるか疑問である。

この階層の牧場は、一面不安定な馬産経営から脱落していく条件をも兼ね備えているものである。

この階層の特徴は、農業経営と密接不可分の関連をもって「人馬一体」という観点から生産、育成が行なわれている。この階層は、中農以上の階層であり、自己の生産手段と自家労働力を中心として、農業経営の一環として馬産経営を取入れており、つねに収益性を求めて拡大発展に努力しようとしているが、経営条件の不備や農業生産との競合などによって、その目的を遂行しえないというのである。

b. 小規模牧場

この階層に属する牧場は家族労働力を中心とし、農業経営とは半密着的な主馬副農的なサラ、アラ併飼で、基礎牝馬3ないし5頭飼養している牧場である。この階層は母屋の一隅を馬小屋にしているとともに、独立厩舎をもち、零細牧場から施設面でも一歩前進した階層である。この階層になると毎年、産駒を生産し販売することができ、馬産経営として自立化が可能となる条件を備えつつある。

この階層はわが国の軽種馬生産の根幹をなすものであり、地帯的には北海道日高、胆振地方を中心に、青森などの内地馬産地にも点在する。

この階層は競馬の消長に敏感であり、とくに競馬ブーム以降の規模拡大への努力はめざましい。しかし主幹自家労働の限界内での拡大であり、雇用労働を入れてまで規模拡大はしておらない。また基礎牝馬はサラ、アラ併飼であるが、サラ系への増頭傾向は強くあらわれている。その際、仔分け方式による規模拡大がみられる。すなわち、サラ系は仔分け方式により規模拡大をはかり、アラ系は自己有馬方式によって規模拡大をはかろうとしている。

この階層になると、地方競馬の馬主ないし騎手との接触が多少あるが、地元の大牧場との結合がある点も特徴的である。

農業経営では大農以上に属し、土地の所有も多い関係から、放牧、採草地を整備しているものの当才馬のみを飼養し、2才馬は育成牧場または大牧場に預託している。当才馬売却は多少あるとしても、ほとんどが2才馬まで飼育し売却をするのがこの階層では一般的である。

c. 中規模牧場

この階層に属する牧場は、牧歌的なイメージが若干わく程度の牧場である。この階層になると農業経営からは完全に分離し、馬産専業であり、企業的性格を内包し、労働力も雇用労働が中心となり、家族労働は従となっている。基礎牝馬はサラ系が中心となり、その所有形態も自己有馬となり、牧場での飼育の限界以上の繁殖牝馬は、地元の小規模、零細牧場へ仔分け方式ないし貸付け馬とし

て放出している。

取引形態もほとんどが中央競馬ないし地方競馬の馬主、調教師、騎手との庭先取引が中心となり、セリ市場への依存度はほとんどない。このような庭先取引が多いのは良血馬生産ということである。すなわち優秀な種牡馬、繁殖牝馬を所有していることによって、その産駒は将来のレースに対する期待が高いために、当才馬のうちから予約し販売が成立することになる。優秀な種牡馬を確保するためにも、シンジケート (Syndicate) への加入ということになる。この階層は厩舎、追馬場、運動場、放牧地、採草地などの飼育条件が整っている。

自己の牧場で生まれた産駒は当然2才まで飼育するが、地元の零細、小規模牧場の預託をうけ飼養する場合もある。

この階層の経営形態はほとんどが法人組織となっており、資本主義的企業化の方向で運営がなされている。

d. 大規模牧場

この階層に属する牧場こそ牧歌的 (Pastoral song) なイメージのわく牧場である。広々とした草原に草をかむ馬の姿がみられるのもこのクラスである。これらの牧場は法人組織の専業経営である。オーナー・ブリーダー (馬主兼生産者) (Owner breeder) の場合もある。これらの牧場はサラ系専養で、雇用労働がその中心となり、資本主義的企業として馬産経営がなされている。ここで生産される仔馬はほとんどがいわゆる良血馬であり、庭先取引の対象馬となり、セリ市場で販売されることは皆無である。優秀な種牡馬、繁殖牝馬をもち、思うがままの交配を行ない、期待すべき新馬を生産しようと意欲的である。また多くの種牡馬を所有すべくシンジケートに加入し、種付けの権利を確保することにも努力を払っている。

この階層に属する牧場はオーナー・ブリーダーでない場合は、中央競馬の馬主、調教師との接触が強い。したがって、中央競馬に出走している競走馬のその30%程度 (中央競馬の在籍馬数3,800頭のうち1,090頭 (28.6%) は38牧場で生産されたものである) が、この階層の属する牧場で生産されたものである。

競馬ブームのなかで、企業の一環として軽種馬生産に資本投資をしようとする傾向があるが、ほとんどこの階層でなければ企業的採算にならないことから、この階層が資本投下の対象階層といってもよい。しかし軽種馬生産は動植物の原生的な生産力を前提とするものであるから、一般製造業のような画一的かつ良質の生産を、自由に行ないうるものとは性質が異なっている。軽種馬生産を資本の論理性のみで貫徹することはできない。

む す び

軽種馬生産の階層的特徴の概観を述べてきたが、階層的特徴のもうひとつの側面である仔分け生産方式を分析検討を加えない限り、階層的特徴の分析としては不充分であることをお断りしておきたい。

ここで述べてきた階層的特徴について要約しておこう。

第1に全体的に飼養戸数の減少傾向がみられ、1～2頭規模の減少が目立ち、6頭規模以上層では逆に増加し、さらに16頭規模以上層では着実に規模拡大をはかり、企業的経営の展開が行なわれている。両極に分解が進行していると考えられる。

第2にアラ系は零細、小規模牧場に、サラ系は中、大規模牧場に飼養されており、その階層性がみられる。

第3に少数の大規模な企業的牧場からは、量、質ともに優秀な馬が生産されている。軽種馬生産の低辺をささえる多数の零細、小規模な牧場からは量、質ともにやや劣る馬が生産されている。資本の集中化によって軽種馬生産は量、質ともに階層的に両極に分解しているものと考えられる。